

羅 針 盤			方 策	点検・評価		達成度	達成状況のまとめ及び次年度の課題	学校関係者評価
評価対象	評価項目	具体的数値項目		自己評価	外部アンケート等	総合		
I 特色ある学校づくりに努めていますか。	1 太田高校ランドデザインに沿った教育活動を行っていますか。	① 学校に対し、好きだと感じている生徒(学校生活が充実していると感じている生徒)が、85%以上である。	○大規模伝統校としての良さを生徒も職員も感じられる学校づくりを行うため、ランドデザイン等を共有しながらさらに統一した指導に努めていく。スクールポリシーを踏まえ3年間を見据えた指導を実践するとともに、生徒の多様な価値観を職員間で共有し、より深い生徒理解を実践する。 ○ICTの活用等による主体的・本質的な学びを推進するとともに、エージェンシーを意識した授業展開や手法を職員全体で開発し、協働的な学びの機会を増やす。	A	A	A	○各学年とも、学校のことを「とても好きだ」「好きだ」と回答している生徒が88%を超えている(3年生94.7%、2年生88.0%、1年生89.6%)。2・3年生は昨年(1・2年次)と比較して割合が増加した。授業内容(レベル・内容・量など)に対する満足度は3年生94.3%、2年生86.9%、1年生90.0%であり、本校の根幹をなす質の高い授業への評価は高い。今後も生徒がエージェンシーを発揮しながら学びを深められるよう授業改善を図っていくとともに、学校行事の充実等魅力ある生徒主体の学校運営を進めていきたい。	○伝統・校風を守りつつも、変化する点があれば、対応していったらいい。  ○グラデュエーション・ポリシーにある「失敗力」は重要だと思う。失敗しても大丈夫という雰囲気や学校全体で醸成してほしい。
		② 3年間を見通した系統的・計画的な学習指導・進路指導により、第一志望校への合格率80%以上、国公立大学合格者数150名以上である。特に難関国公立大、医学部医学科合格者数が30名以上である。	○学年・教科・探究部、進路指導部の各部署が連携して、学校として統一をとりながら3年間を見通した進路指導体制を確立する。 ○学力向上や進路(キャリア)に関する意識が高められる内容を検討したうえで、各学年ともに適切な進路やキャリア教育的な行事を実施する。特に、面談や学年集会等を通じて高い志の維持や第一志望への強い意志が持てるように、早期から系統的にきめ細やかな指導を実践する。 ○他校との情報交換や外部機関の研修会への参加を通して、進路実現に向けた授業改善と進路行事の精査・改善を押し進める。 ○部活動顧問と担任とが緊密に情報交換を行い、生徒の状況に合った活動ができるような環境づくりを進める。 ○各部活動とも一段階上の目標を掲げるとともに、本校部活動指導方針に基づき、主体的・効率的な活動を促進し、生徒の【コアパフォーマンス能力】・【失敗力】の育成とともに実績の向上を図る。 ○正副顧問間の連携を図ることで、生徒の安全確保に努めるとともに、職員のワークライフバランスにも配慮する。	A	A	A	○学年、教科、探究部、進路指導部の各部署が連携し、3年間を見通した指導体制がしっかりと機能している。3年生の生徒たちの模擬試験の成績などから、左記の目標値を達成できる可能性は十分にあると考えている。 ○三者面談、二者面談の回数についての質問に対して、適当と答えた1年生は85.1%、2年生89.2%、3年生90.4%だった。また、「担任と面談することによって、現状理解や進路についての展望が深まったか」の質問に対して、「おおいに深まった、深まった」と回答した3年生は93.2%という高い数値を示している。きめ細やかな指導に導かれて、生徒たちが高いモチベーションを維持して第一志望の大学を目指していることがうかがえる。	○生徒は部活動にも盛んに取り組みながら、学習にも努力をされていてすごいと思う。今後も充実した活動を期待している。
		③ 部活動加入率が各学年90%以上で、この内80%以上が積極的な活動である。	○部活動顧問と担任とが緊密に情報交換を行い、生徒の状況に合った活動ができるような環境づくりを進める。 ○各部活動とも一段階上の目標を掲げるとともに、本校部活動指導方針に基づき、主体的・効率的な活動を促進し、生徒の【コアパフォーマンス能力】・【失敗力】の育成とともに実績の向上を図る。 ○正副顧問間の連携を図ることで、生徒の安全確保に努めるとともに、職員のワークライフバランスにも配慮する。	B	C	C	○1年生のアンケートから、部活動(委員会・同好会を含む)に「加入している」生徒が86.2%、そのうち「極めて積極的に・積極的に参加している」生徒が78.1%である。「部活動加入率90%以上」という目標に届いていないため、教職員全体で部活動の価値(学力との関連性など)を改めて伝達していきたい。 ○活動については、「極めて積極的に・積極的に参加している」の合計値が、2年生で70.6%、3年生で68.3%であり、昨年度より数値が下がった。学校の中核となる2年生の数値を高くするために改善を図りたい。	
II 生徒の意欲的な学習活動について適切な指導をしていますか。	2 生徒の実態に応じた指導を行っていますか。	④ 授業に満足している生徒が85%以上である。	○60分授業を有効活用するために、時間配分、ICTの活用等新たな課題に対して継続的に工夫・改善・見直しを図る。 ○新学習指導要領および本校生徒に身につけてほしい資質・能力を踏まえ、【探究力】・【メタ認知能力】・【プレゼンテーション能力】を育成するために、主体的で対話的な深い学びを意識した授業を推進し、生徒の目標に沿った進路実現に導く。 ○互見授業や研究授業を通じて、各教員の指導力と生徒理解力の向上を図る。 ○各教科・科目において習熟度別対策をできる範囲で実施する。 ○土曜課外については、回数の適正化や目標および目的の明確化によって生徒の学習意欲の向上を図るとともに、実施時期の適正化や実施内容の改善を推進する。特に、地歴・公民・理科の実施や習熟度別課外の実施等、生徒の実態により即した内容となるように弾力的に活用する。 ○通常授業の充実を柱に、課外・補習の役割分担や位置づけを明確にし、それぞれを的確に補完させながら生徒全体の学力向上を図る。 ○課外・補習の実施状況や実施内容を定期的に検証し、生徒の満足度を高める。	A	A	A	○授業内容に「満足」と答えている生徒が各学年ともに85%以上である(3年生94.3%、2年生86.9%、1年生90.0%)。各学年とも満足度の高い授業が展開されていることがうかがえる。成績上位層への刺激と下位層への手当を考慮する必要がある。今後も目標を明確にした授業改善に努めていきたい。 ○ランドデザインに基づいた学校運営を進めるとともに、ランドデザインのブラッシュアップを図り、生徒・保護者・地域が満足できる学校像を構築していきたい。 ○習熟度授業は主に3年生に対して実施しているが、数学・英語等の習熟度授業に満足している生徒が95.0%と高い数値を示している。より良い方策になるよう修正しながら習熟度授業を継続して行くことが望ましいと考えている。 ○補習・課外授業に対する満足度は、3年生は73.3%と例年と比べてやや満足度が低い。土曜課外に対する満足度が1年生70.7%、2年生70.2%と例年よりも高いが、両学年ともに目標を下回っている状況である。1・2年生の土曜課外、3年生の補習・課外ともに改善の余地があり、課外ごとに目的を明示し、意欲的に取り組めるものとなるよう工夫していきたい。 ○授業第一主義のもと、ICTの活用などにより授業改善を推進させるとともに、授業を補完するための課外や補習、課題等を適切に調整し、文武両道のバランスの取れた生徒の育成に尽力していきたい。 ○土曜課外については、模擬試験対策に重点を置いたが、時間の制約によって解説が十分にできなかったり、難易度と生徒個々の能力が不一致を起していたりして、生徒の満足度を下げる要因になっているのではないかと考える。模擬試験の対策として実施することは一定の評価を得ているので、実施方法を調整していきたい。	○国語学習の重要性を感じている。太田高校でどのように国語の力を付けさせていくか検討していったらいい。  ○生徒一人ひとりがやりがいや充実感を感じ、高みを目指すことは重要である。ぜひ一層上を目指して取り組んでもらいたい。  ○土曜課外に対する生徒と保護者の評価の差が気になった。生徒に対して意義を理解させて取り組ませる必要もあるのではないかと感じる。
		⑤ 進路実現に向けて実施している、補習・課外授業に満足している生徒が80%以上である。	○探究部を中心に進路指導部や学年と連携を密にし、計画的・系統的な学習活動を実施する。特に1学年では、自校内における講演会やセミナー、企業研究所訪問研修などの外部機関への訪問を通して興味関心を広げながら、個人探究のテーマである「21世紀の担い手として創造したい社会」を見出す教育活動を実践していく。2学年では、1年次に設定した「創造したい社会」を実現するために、フィールドワークや実験・研究活動が計画的に実施できるようにし、「創造したい社会」と現実の社会の差を埋める探究活動を実施する。 ○外部機関への訪問後など、生徒が主体的に発表する機会を多く実施する。 ○2学年は個人探究の成果として、全生徒1つ以上コンテストに応募する。 ○「総合的な探究の時間」の内容について保護者理解を深めるために、Webページへの掲載等を通じて学校からの発信を推進する。	B	B	B	○補習・課外授業に対する満足度は、3年生は73.3%と例年と比べてやや満足度が低い。土曜課外に対する満足度が1年生70.7%、2年生70.2%と例年よりも高いが、両学年ともに目標を下回っている状況である。1・2年生の土曜課外、3年生の補習・課外ともに改善の余地があり、課外ごとに目的を明示し、意欲的に取り組めるものとなるよう工夫していきたい。 ○授業第一主義のもと、ICTの活用などにより授業改善を推進させるとともに、授業を補完するための課外や補習、課題等を適切に調整し、文武両道のバランスの取れた生徒の育成に尽力していきたい。 ○土曜課外については、模擬試験対策に重点を置いたが、時間の制約によって解説が十分にできなかったり、難易度と生徒個々の能力が不一致を起していたりして、生徒の満足度を下げる要因になっているのではないかと考える。模擬試験の対策として実施することは一定の評価を得ているので、実施方法を調整していきたい。	○探究活動のプレゼンテーションなどを通じて、人前で発表することにも慣れてきているようである。将来にも生きるのではないかと感じている。
		⑥ 総合的な探究の時間を中心とした探究的な学習活動で、【プレゼンテーション能力】・【探究力】が身に付いたと自己評価する生徒が80%以上である。	○探究部を中心に進路指導部や学年と連携を密にし、計画的・系統的な学習活動を実施する。特に1学年では、自校内における講演会やセミナー、企業研究所訪問研修などの外部機関への訪問を通して興味関心を広げながら、個人探究のテーマである「21世紀の担い手として創造したい社会」を見出す教育活動を実践していく。2学年では、1年次に設定した「創造したい社会」を実現するために、フィールドワークや実験・研究活動が計画的に実施できるようにし、「創造したい社会」と現実の社会の差を埋める探究活動を実施する。 ○外部機関への訪問後など、生徒が主体的に発表する機会を多く実施する。 ○2学年は個人探究の成果として、全生徒1つ以上コンテストに応募する。 ○「総合的な探究の時間」の内容について保護者理解を深めるために、Webページへの掲載等を通じて学校からの発信を推進する。	A	B	A	○「総合的な探究の時間」を中心とした探究活動で「探究力」「プレゼンテーション能力」が身に付いていると答えた生徒が1年生では85.9%、2年生では70.9%であった。1年生は目標を達成することができたが、2年生は目標を下回ってしまった。プレゼンテーションに関しては年3回予定されている中でまだ1回の実施なので、残り2回の機会を貴重な成長の場とさせたい(太田女子高校との合同発表会(1・2年)に加えて、2年生は個人探究最終発表会、1年生は個人探究テーマ発表会を実施予定)。 ○2年生全員が個人探究の成果としてマイプロジェクトアワードに応募した。コンテストへの応募を促進させ、進路実現にも繋げていきたい。 ○「総合的な探究の時間」を中心とした探究活動で「探究力」「プレゼンテーション能力」が身に付いていると答えた保護者は約60%である一方、わからないと答えた保護者が30%であった。引き続きWebページへの掲載等を通じて学校からの情報発信を行ってほしい。 ○探究活動における主体的な活動が、自主的に自分の進路を考え、学習に向かう姿勢を養うことにつながっており、その成果が各学年の模擬試験等の結果にあらわれているのではないかと考える。	
3 生徒は確かな学力を身に付けていますか。		⑦ 学習に対する達成感・満足感を持っている生徒が70%以上である。	○学年を中心に、学級担任・教科担当との連携に基づいた二者面談等を通じて生徒の状況を把握したうえで、学習法や目標設定など生徒への適切な支援を行う。 ○学習に対する達成感を高めるために、各テストの目的・意義の明確化や記述・論述問題を適切に取り入れた作問の工夫を図る。 ○客観的な指標として模擬試験結果の分析を通じて中期的な育成課題を洗い出し、学習におけるポイント(学習方法や科目バランス)を明確にする。 ○個に応じた学習指導を展開するために、生徒の状況に応じた小グループでの指導や添削の学年横断的な取組を継続し、個々の教員の指導力向上を図り、生徒に還元する。	A	A	A	○「担任と面談したことによって現状理解や進路についての展望が深まったか」の問いに対して、3年生93.2%、2年生90.6%、1年生86.6%が深まったと回答しており、十分に担任と生徒が進路に対する情報共有ができていることがうかがえる。継続的に二者面談を通じて生徒の成長を促していきたい。 ○「授業→定期考査・学力テスト→やり直し(振り返り)」を1つの学習サイクルとすることで生徒の学びを支援する形ができつつある。試験後に出題者が作成した解答解説を用いて生徒に試験の振り返りを促す指導が継続的に行われており、生徒の知識定着に高い効果があると同時に、出題者としての教員の作問力の向上が図られている。 ○各学年において、難関大セミナー、医学部医学科セミナーへの参加者を募り、3年間を見通して継続的な指導が行われている。進路関係のデータを用いたり、添削指導を行うことで、高い目標を掲げる生徒のモチベーションの維持に役立っている。	
		⑧ 学習内容の定着等のために、家庭での1日当たりの平均学習時間は3時間以上である。	○「予習・授業・復習・試験・ふりかえり」を1セットとして学習のサイクルを回し、試験後のふりかえりとやり直しを実施し、思考する素材となる【基礎的な知識・技能】が身につく、生徒が自主的に家庭学習に取り組めるよう、授業改善をさらに推進する。 ○主体的な学習者になるように、学年、教科が連携し課題の量や内容が生徒の実態に合うように改善を図る。習熟度によって課題の内容を分けることも検討する。また授業との関連や生徒の学習意欲の喚起にも留意し、計画的に課題を課す。 ○生徒の進路意識を高めるため、進路講演会等の進路行事の改善や充実を図る。特に、【メタ認知能力】を育成するために、外部講師の活用と校内教職員による指導を適切に活用する。 ○学習時間調査を定期的実施して学習時間を定観測することで、生徒の学習状況を把握する。また、二者面談などを通じて適切なフィードバックを与えることで、生徒の学習意欲向上の支援を行う。	B	B	B	○「予習・授業・復習の学習サイクルが確立している」と回答した生徒は、3年生78.0%、2年生85.1%、1年生81.1%と高い数値を示している。低学年時からしっかりと学習習慣が確立されている。3年生に関しては演習形式の授業も多く、予習を必要としていない教科・科目があることも考慮に入れる必要がある。 ○「平日の平均家庭学習時間が3時間以上の生徒」は3年生82.5%で、受験生としての自覚が十分である。2年生は31.0%、1年生は16.4%であるが、文武両道を実践し部活動や各自の活動を行っている生徒も多いため悪い結果とはいえない。スキマ時間などを有効活用するなどの指導が必要と感じる。 ○保護者会、模擬試験の振り返りなどを外部から講師を招いて実施することで、生徒、保護者、教員ともに最新の情報を共有することができている。進路講演や振り返りの内容をブラッシュアップしながら継続的に活動していきたい。 ○長期休業明け、定期考査前などを中心に継続的な学習時間調査を行い、二者面談などで生徒へフィードバックしている。定期考査、学力テスト、模擬試験の結果と学習時間の相関を確認しながら、より効果的に指導できるよう工夫していきたい。	

Ⅲ 生徒の充実した学校生活について適切な指導をしていますか。	4 組織的・継続的な指導を行っていますか。	⑨ 職員会議や学年会議において、生徒に関する情報交換を月に2回程度行っている。また、生徒アンケートや学年分掌の情報交換を通して、いじめの発生防止と発見に努め、いじめの解消100%をめざす。	○適切な指導を行う前提として生徒に関する必要十分な情報を共有するため、月2回以上の学年会議と相談係会議を設定する。また、つまずきや不登校の予防的指導を重視し、定例会議だけでなく日頃から教職員間の連携に努める。 ○「いじめはどここの学校でも存在する」という共通認識のもと、生徒アンケートや学年・分掌の情報交換を通し、いじめの未然防止に努め、発見しだい迅速かつ適切に対応して、いじめの根絶を図る。	A	B	B	○毎回の運営委員会と職員会議の全18回（12月末現在）で綿密に生徒の情報交換・情報共有を行った。問題を抱える生徒に対して個別の指導計画の立案を含めて指導してきたい。 ○現在（12月末現在）までのいじめ認知件数は1件である。引き続きいじめのアンケート調査に加えて、日常的な観察・面談等を通して、いじめの未然防止・早期発見・早期対応に努めていきたい。	○教室が狭いように感じた。空いている教室などの活用も考えていてもらいたい。  ○煌焔祭や球技大会などに積極的に取り組んでいた姿が印象的である。生徒の主体性を活かした行事づくりにさらに取り組んでもらいたい。
		⑩ 生徒会行事に満足感・達成感を持っている生徒が70%以上である。	○行事の企画や運営などにおいて、生徒の【コオペレーション能力】・【探究力】・【プレゼンテーション能力】育成のため、生徒が主体的に取り組むことができるように、大胆に生徒に裁量権を与えて活動させる。 ○煌焔祭に向けて、生徒の主体的な活動をサポートしながらも、適度なつまずきに基づく【失敗力】の育成を心掛け、充実感に満ちた行事にする。	A	A	A	○生徒会行事については、煌焔祭・球技大会を実施するとともに、事後アンケートでは生徒の90%近くが積極的に参加したと回答した（3年生90.0%、2年生90.7%、1年生87.7%）。今後も生徒が主体的に活動できるように支援してきたい。 ○学校行事に対し生徒がエージェンシーを発揮できるよう、十分な準備期間を設けている。失敗力を涵養できるよう、生徒に多くの躰きを経験させながら、教員が手を回しすぎないように心がけている。生徒一人ひとりが主体的に取り組めるように留意している。	○子供からも太田高校でいじめがあるようには聞いていない。今後も生徒一人ひとりに寄り添うとともに、いじめが発生しないような環境作りに取り組んでもらいたい。
		⑪ 職員・生徒・保護者間のコミュニケーションを密にする取組を行うとともに、学校生活に積極的に取り組んでいる生徒が80%以上である。	○各学期ごとの二者面談や三者面談の「ねらい」を明確化し、面談の成果をあげる。 ○保護者の視点に立った情報発信を行い、三者間の連携を密にする取組（三者面談、学年保護者会、保護者アンケートなど）を有効に活用して、相互信頼関係を構築し、透明性と安心感のある学校づくりを進める。	A	A	A	○生徒については、3年生93.2%、2年生90.6%、1年生86.6%が三者面談で現状理解や進路展望が深まったと回答している。教員と保護者が直接コミュニケーションがとれた三者面談は大変貴重な機会となった。日頃から情報の送受信を積極的に行い保護者との連携を深めていきたい。 ○生徒が学校生活全般に積極的に取り組んでいると感じる保護者は3年生79.9%、2年生80.5%、1年生83.9%であった。今後も生徒が主体的に学校生活を送れるよう対策していきたい。 ○「学年通信や『進路ジャーナル』は保護者が知りたい情報を伝えてありますか」の問いに対して、伝えていると回答した3年生保護者は87.9%、2年生保護者は80.1%、1年生保護者は86.8%である。まだまだ、改善の余地はあるものの一定の評価を得ることができた。さらに、保護者のニーズに応えられるような情報発信を行ってきたい。	○高校生の自転車事故が気になる。ヘルメットの着用を含め、交通安全やマナーに対する指導にこれからも取り組んでもらいたい。
	5 学校はいじめの防止や早期発見に向けた取組を積極的に行っていますか。	⑫ 「学校は、いじめの防止や早期発見に向けた取組を積極的に行っている」と認識している生徒が80%以上である。	○生徒会活動や学級活動を通じて生徒の【メタ認知能力】を育成し、生徒主体のいじめ防止活動を実施する。 ○いじめ防止や早期発見のためには保護者との連携が重要であるため、いじめ防止に対する学校の取組を、Webページに積極的に掲載する。 ○「いじめ防止等の取組状況調査（生徒・保護者）」を通じて、学校の取組を検証する。	B	B	B	○本校のいじめの未然防止や早期発見とその解消に向けた取組について生徒の83.4%、保護者の58.4%が肯定的な意見であった。また、37.5%の保護者からは、わからないとの回答をいただいた。学校側の周知努力をより強化したい。	
		⑬ いじめと真剣に向き合い、常にいじめを許さない気持ちと態度で臨んでいる生徒が90%以上である。	○年間2回実施している「いじめ防止強化月間」で、のぼり旗等を利用した活動を通して、学校全体でいじめに対峙していく集団を形成し、【コオペレーション能力】の育成をめざす。 ○「スマホ利用ルール」を周知し生徒・保護者を交えて再認識することで、SNSを介したいじめの未然防止に努める。 ○「挨拶運動」を年間2回・2日間実施し、円滑な人間関係の醸成を図る。	A	B	A	○いじめ防止フォーラムの成果ポスターやいじめ防止強化月間・あいさつ運動等を通して、いじめ防止に対する意識向上を図れた。 ○94.7%の生徒がいじめに真剣に向き合う態度を持っている。生徒間のトラブルは複雑で表面化しない問題もあるため、生徒の生活に目を配り、変化を見逃さないよう職員間で情報を共有していきたい。	
	6 生徒は健康で、規則正しい学校生活を送っていますか。	⑭ 家庭と連携をとりながら、(正当な理由でない)遅刻を0%にする。	○基本的な生活習慣の確立は充実した学校生活の基盤であることを、生徒が様々な場面において自覚できる機会を設け、【メタ認知能力】の育成とともに自己管理能力を高める。 ○「家庭は安心して生徒を送り出す、学校は責任を持って生徒を迎える」という関係性に基づいて、学校と保護者の信頼関係を構築する。 ○交通安全指導・登校時指導を通して、ゆとりのある登校を心掛けさせ、生徒の生活習慣の確立を促す。 ○「保健だより」を定期的に発行し、感染症などの予防や、生徒の体調管理に役立つようにする。	B	B	B	○2学期の遅刻(合計867 1日平均11.4人)は1学期(合計446 1日平均6.3人)に比べ増加傾向であり、昨年度(11.0人)よりも若干ではあるが増加した。一昨年度(10.6人)と比較しても、増加傾向である。アンケートから規則正しい高校生活を送っているという生徒の割合は77.5%である。昨年度(81.8%)に比べて減少している。 ○94.7%の生徒が安全な登校を心がけているという結果を得たが、交通ルール・マナー等において依然として改善すべきところが多い。集会等を通して交通事故を未然に防ぐ観点からも安全な登下校を心がけるよう、保護者とともに指導していきたい。 ○「保健だより」などにより、健康・安全について情報を提供し、心身ともに健やかに充実した高校生活が送れるよう支援していきたい。	
⑮ 学校から提供される進路情報が役立っていると評価する生徒が70%以上である。			○進路指導室や資料室を生徒が利用しやすいように整備し、必要な情報をタイムリーに得られるよう工夫する。 ○生徒及び保護者に対して進路情報を適切に提供できるよう努める。特に保護者会や三者面談の機会では情報を精査したうえで資料を準備する。 ○情報発信について、紙媒体やデジタル媒体(スマート連絡帳、Classroom、Webページ)を、場面や状況に応じて使い分ける。 ○学習法等について、進路指導部が各学年等を通じて生徒に提供できる情報をより整備する。	A	A	A	○進路資料室の整備は進んでおり、生徒たちも赤本の利用を積極的に行っている様子がかがえる。資料の整理に関しては、まだ改善の余地があると認識しているので、棚の設置も含めて検討していきたい。 ○「生徒が主体的に進路を選択できるように進路情報が提供されていると思いますか」の問いに対して、「されている」と回答した3年生保護者は76.9%、2年生保護者は72.8%、1年生保護者は76.5%である。改善の余地はあるものの一定の評価を得ていると考える。一方で、保護者と生徒が進路情報を共有できていない家庭が増加傾向の懸念がある。情報発信の方法・内容を改良しながら、引き続き保護者との情報共有に努めていきたい。 ○「学校からの進路情報は、進路を考える際の役に立っていますか」の問いに対して、「役立っている」と回答した3年生93.1%、2年生88.2%、1年生86.2%となった。日頃の各学年からの情報発信が的確に行われていることがうかがえる。	○高校進学時から大学への指定校推薦等に目を向けているような時代になってきている。様々な対応を考えてもらいたい。  ○打たれ強さも必要と考えている。現在の生徒は大変恵まれた環境で育っているが、社会に出ると必ずしもそうではない。学校が疑似社会としての役割を果たしてほしい。
8 生徒は自らの進路について真剣に考え、その実現に向けて取り組んでいますか。	⑯ 自らの進路について考え、日々の生活に取り組んでいると自己評価する生徒が70%以上である。	○探究活動の計画的な指導を充実させることで、進路指導・キャリア教育と連携した活動となるように整備する。特に、生徒の発達段階に合わせて自らの将来を見通せるように【メタ認知能力】の育成をめざす。 ○自身の進路(キャリア)と高校生活が密接に関連していることを認識させ、学習や探究活動、部活動などの場面で動機づける。 ○オープンキャンパスやインターンシップ(社会への試行的参加活動)などへの積極的な参加を推進する。	A	A	A	○探究部長と進路指導主事で連携を深め、探究活動と進路指導の一体化を図っている。 ○「自らの進路について考え、その実現に向けて日々の生活に取り組んでいますか」の問いに対して、「取り組んでいる」と回答した3年生は95.4%、2年生は84.4%、1年生は83.3%である。探究活動において主体的に活動する姿勢が、進路を考える日々の活動につながっていると考えられる。 ○1年生で企業研究所訪問研修、2年生でフィールドワークを実施することで積極的に社会との接点を持っている。		
		⑰ 学校からの情報発信に満足していると評価する保護者が70%以上である。	○スマート連絡帳やWebページ、インスタグラムを活用することで適切な情報発信を行う。 ○見やすく、わかりやすいWebページの作成を心がけるとともに、各分掌との連携を深めることでタイムリーな情報発信を行う。	A	A	A	○本校のWebページおよび情報発信に対して、85%以上の保護者が満足しているとアンケートに答えている。次年度も各分掌との連携を深めることでタイムリーな情報発信に努めていきたい。	○少子高齢化が進む中でも地域の行事等を進めていかなければならないところがある。地区からの要望があれば応えてもらいたい。
Ⅴ 開かれた学校づくりに努めていますか。	9 家庭、地域社会に積極的に情報発信をしていますか。	⑱ ICTを活用した教育活動を行っている教員が70%以上である。	○教職員が、ICTを活用した教育活動に取り組みやすいように校内の環境を整備する。 ○校内の研究授業において、ICTを活用した授業の取り組みを推進する。 ○校内において研修や意見交換会を開催し、有益な情報の共有を図る。	A	A	A	○アンケートにおいて、85%の生徒が授業等でICT機器を活用していると答えている。 ○教職員へのタブレットの配付により、授業においてICTを活用する実践が増加した。昨年度からは自動採点ソフト「百問繰乱」を県全体として使用するようになり、定期テストや小テストでも活用されている。ICTはもはや欠くことのできない存在となっているので、授業への活用方法について、教職員間での情報共有をさらに深めていき、よりよい授業実践につなげていきたい。	○生成AⅠの普及・活用が進んできている。今後は生成AⅠに対する活用リテラシーなどについても対応を考えて行く必要があると考える。
		⑲ オンラインによるアンケートを5回以上実施する。	○学校行事や授業に関するオンラインのアンケートを積極的に実施する。 ○ICTでのスピード間のある連絡等を積極的に行い、ペーパーレス化を促進するとともに、生徒・保護者理解を深める。	A	A	A	○学校行事や学年行事のアンケートなど多岐にわたって年5回以上のアンケートがICTを用いて実施されている。生徒からの授業に対する振り返りや意見聴取に使用している職員も多く、ICTの活用は業務の簡素化・迅速化に確実に貢献している。	
Ⅵ 教育デジタル化に努めていますか。	10 教育活動におけるICTの活用を推進していますか。	⑲ オンラインによるアンケートを5回以上実施する。	○学校行事や授業に関するオンラインのアンケートを積極的に実施する。 ○ICTでのスピード間のある連絡等を積極的に行い、ペーパーレス化を促進するとともに、生徒・保護者理解を深める。	A	A	A	○学校行事や学年行事のアンケートなど多岐にわたって年5回以上のアンケートがICTを用いて実施されている。生徒からの授業に対する振り返りや意見聴取に使用している職員も多く、ICTの活用は業務の簡素化・迅速化に確実に貢献している。	
		11 業務におけるICTの活用を推進していますか。	⑲ オンラインによるアンケートを5回以上実施する。	○学校行事や授業に関するオンラインのアンケートを積極的に実施する。 ○ICTでのスピード間のある連絡等を積極的に行い、ペーパーレス化を促進するとともに、生徒・保護者理解を深める。	A	A	A	○学校行事や学年行事のアンケートなど多岐にわたって年5回以上のアンケートがICTを用いて実施されている。生徒からの授業に対する振り返りや意見聴取に使用している職員も多く、ICTの活用は業務の簡素化・迅速化に確実に貢献している。